

| | |
|-------------|---|
| Title | 男子生殖腺にかんする用語の歴史的変遷 --睾丸から睾丸,そして精巣へ-- |
| Author(s) | 友吉, 唯夫 |
| Citation | 泌尿器科紀要 (1985), 31(2): 199-206 |
| Issue Date | 1985-02 |
| URL | http://hdl.handle.net/2433/118417 |
| Right | |
| Type | Departmental Bulletin Paper |
| Textversion | publisher |

男子生殖腺にかんする用語の歴史的変遷

— 一睾丸から睾丸, そして精巢へ —

滋賀医科大学医学部泌尿器科学教室

友 吉 唯 夫

TERMINOLOGIC CONFUSION IN JAPANESE
TERMS FOR THE TESTIS: PAST AND PRESENT

Tadao TOMOYOSHI

From the Department of Urology, Shiga University of Medical Science

In Japan, two scientific words are used for the testis, SEISŌ and KŌGAN. SEISŌ is the word accepted by most of the bioscience societies and etymologically means the nest of sperms. KŌGAN, is a word of Chinese origin and mainly used by urologists. Its etymologic meaning is unclear.

About one to two hundreds years ago, many classical Japanese books of medicine used EKIGAN the Chinese character of which is quite similar to KŌGAN, and which etymologically was described as "pleasure balls of man" by a contemporary anatomist in Japan, although I presume it was intended to mean "a couple of balls, side by side"

In order to avoid terminologic confusion, SEISŌ, the standard word used in many academic fields, is recommended for universal use not only in scientific papers but in daily language in Japan.

Key words: Terminologic confusion, Testis, Japanese medical classics

男子生殖腺に相当する用語の現状

英語の「testis, testicle」、ドイツ語の「Hoden」、フランス語の「testicule」に相当する日本語としては、生物学関係では、すでに1930年代より「精巢」が登場するようになったもの^{1),2)}、医学領域で「精巢」が用いられるようになったのは、1953年日本解剖学会で、正式に「精巢」を採用してからのことである³⁾。現在では、生物学、畜産学では全面的に「精巢」が用いられており、医学領域の解剖学、生理学、病理学でも主として「精巢」が用いられている。しかし、臨床医学では、とくにこの臓器を診療の対象とする泌尿器科医の多くが、いまだに「睾丸」に固執しているという現状である。1975年、日本医学会・医学用語委員会は、「睾丸」を括弧に入れて併記しつつも、「精巢」が当然用いられるべき第1用語であることを示した⁴⁾。ところが、それ以降に出版された泌尿器科学の教科書、参考書、全書などはすべて「精巢」を採用せず、従来

どおり「睾丸」を用い^{5~10)}、ただひとつ、すべての個所に「精巢」、「精巢上体」を括弧に入れて、「睾丸」、「副睾丸」に併記しているものがあるのみである⁹⁾。

日本アンドロロジー学会は、1982年に発足した学際的な学会であり、諸分野の研究者が参加している。当然、男子生殖腺は、その重要な研究対象であり、学術大会抄録集には、その用語が頻出する。そこで、第1回(1982)から第3回(1984)までの学術大会抄録集^{11),12),13)}にあらわれたつぎの3つの用語の使用頻度を調べてみた。

- 1) 精巢 (せいそう)
- 2) 睾丸 (えきがん)
- 3) 睾丸 (こうがん)

「睾丸」は、「こうがん」のつもりで、しるされたものであるが、上に点のないアミガシラに「幸」を書くのは、「こう」とは読めず、「えき」であるので、「えきがん」とした。

泌尿器科以外の演題提出施設と、泌尿器科とにわけ

1982 - 1984

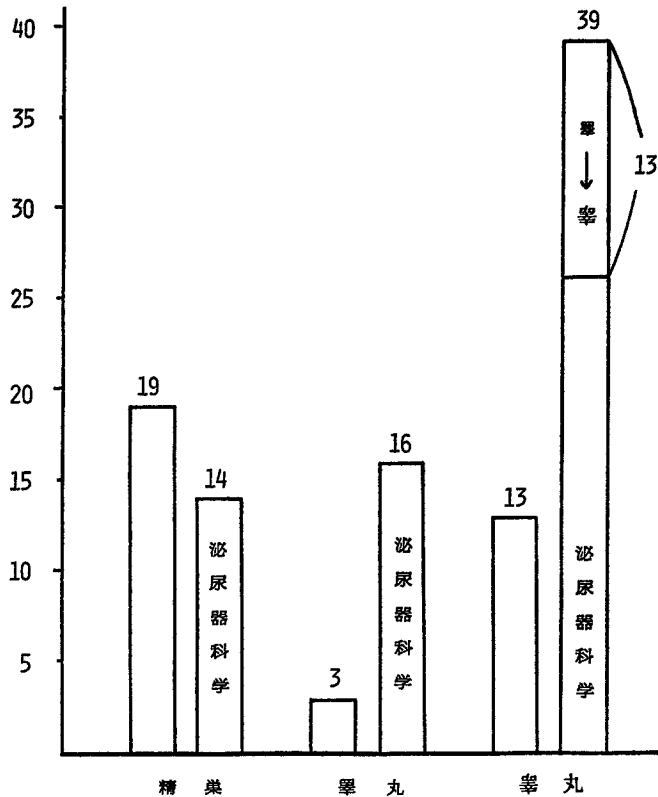


Fig. 1. 日本アンドロロジー学会学術大会抄録集にあらわれた、「精巢」、「睪丸」、「睪丸」の出現頻度

て、それぞれの用語の使用頻度を示したのが Fig. 1 である。「精巢」は全体の34%に用いられているが、泌尿器科以外からの演題では、半数以上が「精巢」を用いているのに対し、泌尿器科からの演題は、「精巢」が20%に過ぎず、残り80%は「睪丸」または「睪丸」となっている。また、「睪丸」のうち13例に「睪丸」という活字がなく、「睪」を「睪」に手書きで訂正した形跡があきらかであった。

「睪丸」と「睪丸」の正統性についての 古文献学的検討

「睪丸(えきがん)」と「睪丸(こうがん)」のどちらが正統な語であるのか、ということを歴史的に検討してみることにした。方法としては、できるだけ多くの古医書にあたって、男子生殖腺を意味する用語の出現する箇所を求めてみた。以下、古いものから順にすることにする。

まず、有名な杉田玄白らの「解体新書」(1774)は

「睪丸(えきがん)」をあてている(Fig. 2)。同じく解剖学書である三谷笙州(みたにしゅうしゅう)の「解体発蒙」(1813)も、やはり「睪丸(えきがん)」となっていて、しかも「エキグワン」と発音ルビを付している(Fig. 3)。これにより、当時の医学者は「エキガン」と呼んでいたことがあきらかである。

臨床系の書物では、Lorenz Heister 著・越村德基訳「瘍科精選図解」(1820年)という外科書が有名であるが、「睪丸(えきがん)」と書かれている(Fig. 4)。また、日本の生理学の父といわれる高野長英の「西説医原枢要」(1832)でも、睪丸(えきがん)となっている(Fig. 5)。現在の精巢上体は、副睪(ふくえき)としている個所がみられる。

19世紀後半になってからの医書では、坪内適齋の「医家必携」(1857)をみると、これも「睪丸(えきがん)」となっており(Fig. 6)、さらに解剖学の書物をいくつか調べてみると、松村矩明訳の「グ列伊氏解剖訓蒙図」(1872)(Fig. 7)、約瑟列第著・松村矩明翻

離養道是主使精送精
 畢九頭則畢九之上邊
 其二三。白色者。是裏其
 其二。莖樣能裏畢九

Fig. 2. 杉田玄白「解体新書」(1774)にみられる「畢丸(えきがん)」

身ノ紳ニ於テ陰莖ト畢丸ヲ
 ドルナリ故ニ後世コレヲ
 ニ化製シ之ヲ精室ニ給
 ニ詳カナルト夫畢丸ハ腎間
 ヨリニ系ト断リテ起ルニ
 又為ニ畢丸ト断リテ起ルニ
 無ト云ハ凡ソノ動物ニ
 擇リテ氣血ノ系ト断リテ起ルニ

Fig. 3. 三谷笙州「解体発蒙」(1813)にみられる「畢丸(えきがん)」。「エキグワン」とルビが付されている。

訳の「解剖訓蒙」(1872) (Fig. 8), 松村矩明「解剖摘要」(1876) (Fig. 9) と、松村矩明の解剖学著作はすべて「畢丸(えきがん)」となっている。また、比較的新しいところで、三浦省軒・長谷川順治郎訳「普俵氏組織学」(1879)でも「畢丸(えきがん)」とされている (Fig. 10)。

以上のように、100年以上の古さをもつ医学古典は、男子生殖腺をあらわすのに「畢丸(えきがん)」の文字をあてていた。ところが、例外があるもので、小森

見其内状。波。畢丸。保。
 者。腸。及。腸。網。居。在。其。

Fig. 4. Lorenz Heister 著・越村德基 訳「瘍科精選図解」(1820)にみられる「畢丸(えきがん)」

香日精帶日陰莖日畢丸日輸精管
 一囊二分チ每蕪各畢丸ヲ藏ム其裏面ニ鞏
 ソ陰莖ノ寒温等ニ由テ縮張スルハ特ニ此
 一水ノ滯留スルナリ ○畢丸ニ二種アリ
 經水脈及ヒ腺ノ細微ナル者互ニ連絡維持
 ヘルヲ以テ概シテ之ヲ云ヘハ腺ナリ一小
 族シテ竟ニ一圓塊ヲナス蓋シ是ハ正畢ノ
 ス者ノ如シ之ヲ横断スレハ白汁出ツ之レ
 然ト見ルヘシ一小腺毎ニ一織管ヲ生ス此
 奥ニ此ヨリ數條ノ小脈ヲ生ス此版上行シ
 ソ精水小腺ニ於テ泌別ヲ受テ化成スレハ
 ○副畢ハ正畢ノ上部外ヨリ案シテ知ルヘ

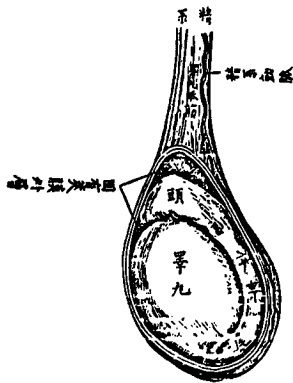
Fig. 5. 高野長英「西説医原枢要」(1832)にみられる「畢丸(えきがん)」

桃鳩(こもりとう)の「病因精義」(1827)では、「畢丸」という語がみられたのである。ただし、この文字を小森がどう発音していたのか、こんにち「畢丸(こうがん)」という語が使われていることに、本書がどの程度関与したのかは不明といわざるをえない。ただ本書以後にも「畢丸(えきがん)」を用いている古医書がほとんどであるので、本書に医学界において、「畢丸」を「畢丸」に転換させるだけの影響力はなかったものとみてよい。

そこで医学書以外に「畢丸」のみられる文献をさがしてみると、皆無ではないことがわかった。江戸中期の医師、寺島良安の著わしたわが国最初の百科事典である「和漢三才図会」(1712)には陰囊(ふぐり)の項に「畢丸」の字がみられる。しかも、この書が、中国書に典拠していることから、やはり中国では古くより「畢丸」も用いられていたものと思われる。それを裏づける事実として、現行の漢和辞典¹⁵⁻¹⁶⁾、中国語辞

泌尿器ノ粘膜ニ利アリ故ニ淋
 ク退キ慢性ノ微ヲ標スル者
 痛ヲ覚ユルハ全ニ用ウ否ラサ
 カヤル微ナリハ全ニ用ウ否ラサ
 淋止ミ尿溢リ攝護鞏丸焮腫メ
 ヲ遺ス粘性遷延肺病モ亦タ然

Fig. 6. 堀内適齋「医家必携」(1857)にみられる「睪丸(えきがん)」



開固有莢膜示睪丸
 之位置之圖

Fig. 7. 松村矩明訳「グ列伊氏解剖訓蒙図」(1872)のなかの「睪丸(えきがん)」

生殖器論
 男子生殖器
 男子ノ生殖器ハ、睪丸及ヒ
 ル者ヨリ成レリ
 睪丸
 睪丸(クレスチハ、二個ノ腺ニ
 蒙クニ蘊藏シ、精系ヲ以テ

Fig. 8. 約瑟列第著・松村矩明翻訳「解剖訓蒙」(1872)のなかの「睪丸(えきがん)」

セラレ、内面ヨリハ、許
 ト称ス、而ソ此膜睪丸ノ
 形ノ起線ヲ生ス、之ヲ縱
 睪丸ハ數多ノ小葉ヨリ
 隙中ニ存ス、而ソ各々甚

Fig. 9. 松村矩明「解剖摘要」(1876)のなかの「睪丸(えきがん)」

精虫ハ何處ヨリ来ルヤ
 精虫ハ睪丸ノ廻轉セル細精管
 リト雖、凡精虫ノ發生スル如何
 議中ニ在テ未タ一定セス乃チ、
 ノ立論者ニ大ナル障碍ヲ致セ

Fig. 10. 三浦省軒・長谷川順治郎訳「普俵氏組織学」(1879)にみられる「睪丸(えきがん)」

痛シ。膀胱ニ連痛ス。甚シキ
 シ。陰部疼痛シ。睪丸攣引シ。
 ク。且惡心。嘔吐。暖氣。呃逆。煩
 初ハ澄清。次ニ帶赤。甚トキ

Fig. 11. 小森桃塙「病因精義」(1827)にみられる「睪丸(こうがん)」

典^{18,20)}、英中医学用語辞典²¹⁾をみると、「舉丸」が用いられているし、諸橋徹次の「大漢和辞典」²²⁾には「景岳全書」や「靈樞経」に「舉丸」や「舉」の字句のあることを示している。現在の中国人医学者に直接確めたところでは、「舉丸」とする人²³⁾と「舉丸」とする人とがあるが²⁴⁾、発音はいずれも「クワンワン」である。

これらの事実をみると、江戸時代から明治初期にかけて、もっぱら用いられていたということだけでは

ル 舉
ヲ ハ
言 懌 典 典 給 即 舉
ナ ナ ニ 懌 也 部 ヤ 和
リ リ モ 同 樂 ニ ン 名
舉 懌 謬 也 收 デ フ
ハ ハ 誤 空 好 ル ル グ
陰 悦 ア シ 也 モ リ
囊 ナ リ ク ト ノ 正 ダ
中 リ 脱 此 云 非 字

Fig. 12. 三谷笙州「解体発蒙」(1813)にみられる「舉(エキ)」の語源的考察

女 少 是 丸
舉 腹 致 丸
ト 膈 文 ノ
謂 腫 ラ ア
ベ キ 云 互 アル
者 オ ニ マ
ハ ハ ス キ
花 必 ナ リ
勝 ズ ナリ
子 女 瘡 曰
藏 舉 ノ 疔 夫
ナリ 誤 男 瘡
下 ノ 舉

Fig. 13. 三谷笙州「解体発蒙」の中にみられる「男舉」と「女舉」

○ 遺精門
遺精之本論
五藏皆有精者人之本
能養慾淫心精氣内守

Fig. 14. 真直瀬道三「啓迪集」(1574)にみられる「精」

レ 養 子
食 道 精
用 無 ト 經
ス ク 云 精
ル 色 經 絡
ニ 情 二 ナ
精 動 ハ リ
ヲ 發 擇 懌
脱 ス 系 ヨ
サル ト リ
セ 一 云 精

Fig. 15. 三谷笙州「解体発蒙」(1813)にみられる「精」をふくむ用語と「舉」と「精」の関係を示す表現

精 胞
ノ 經 ニ
精 脈 輸
ヲ ニ ス
釀 入 ル
化 ニ 一
ス 似 ヲ

Fig. 16. 三谷笙州「解体発蒙」(1813)にみる「舉ノ精」という表現

「睪丸(えきがん)」の正統性を立証できないように思われる。

漢和辞典や中国語辞典のなかには、「睪(えき)」と「舉(こう)」はまったく別のもので、誤用があってはならないとするもの^{15,16)}、誤用がありうるとするもの^{17,20,22)}とがある。誤用がありうるとする場合は、本来「睪(えき)」であったものの「舉(こう)」への誤用、逆に「舉(こう)」から「睪(えき)」への誤用の両者が考えられる。そのどちらであるかに結論を与えることは容易でない。ただ、三谷笙州は、後章で述べるように「睪丸(えきがん)」という呼称について、語源的解説までしており、少なくとも、かれの生きた時代には、わが国では正統な語であったものといわざるをえない。そしてある時期に、おそらく明治中期以降に、睪丸(こうがん)への転化が徐々に進んでいったものと推定されるのである。

「睪丸(えきがん)」ならびに「舉丸(こうがん)」の語源に関する検討

前出の、三谷笙州「解体発蒙」(1813)には「睪丸(えきがん)」の語源的考察がなされている(Fig. 12)。「丸(がん)」は球状の有形物のことであるから、ここでは「睪(えき)」のみが問題となる。三谷によれば、睪→擗→悦となって、男性としての悦喜にかかわる球状物ということなのである。私はこれに異を唱える。

藤堂明保²⁵⁾によれば「睪(えき)」という字には、同様のものが間を置いてひとつひとつつながる、という意味がある。例えば、馬をつないだ宿舎が距離を置いてひとつひとつつながっていれば「驛(えき)」であり、水たまりが間隔を置いてつながっていれば「澤(さわ)」というわけである。それと同じように陰囊の中に、間隔を置いて二つ並んでいる球状物が「睪丸(えきがん)」ということになる。三谷笙州自身、別の個所では、精巢に対して「男睪」、卵巢に対して「女睪(じょえき)」という表現を用いている(Fig. 13)。このことから、「睪(えき)」は左右二つ並んでいる状況を示す語であると考えられるし、寺島良安の「和漢三才図会」¹⁴⁾は「睪丸(こうがん)」を採ってはいないが、「陰囊ノ中二玉有リ(中略)男子ノ命根也」と定義しており、“二つ並んでいる玉”であることを強調しているのである。

いっぽう「睪丸(こうがん)」の「舉」はもともと「広い」とか「高い」という空間を形容する語であるが、なぜ男子生殖腺のことを睪丸と呼ぶのかの語源的説明は見当たらないし、語源不詳としている辞典さえある。

このように語源的記載という点から見ると、三谷笙州が真面目に語源を解説した「睪丸(えきがん)」に、男子生殖腺をあらわす語としての妥当性があるように思われる。

男子生殖腺をあらわす用語の望ましいあり方

こんにち、単行本²⁶⁻²⁸⁾や学会抄録集¹¹⁻¹³⁾などで「睪丸」の字が使用されることがあっても、これはあくまで「こうがん」のつもりであって、「睪丸(えきがん)」を正しいと主張しての記載ではないように思われるが、「こうがん」に二つの漢字表記が存在するのは望ましいことではない。

そもそも、ひとつの臓器の呼称が、ひとつの学問領域で統一を欠くことは、学際領域の拡大しつつあるこんにち、非常に不合理かつ不便なことである。とくに、「睪丸(こうがん)」を頻用している泌尿器科医は、このさい、「舉丸」という語を全面的に排除し、「精巢」を統一的に用いるよう要望するものである。私が要望しなくても、すでに解剖学会や日本医学会が採用している学術用語であるから、当然それにならうべきであったのである。

「精巢」の「精」は、男子生殖器との関係において、古くより用いられている語であり、すでに非常に古い文献である真直瀬道三「啓迪集」(1574)にも、それがみられるし(Fig. 14)、しばしば引用してきた三谷笙州「解体発蒙」(1813)にも、「精」、「精脈」、「精液」、「精経」、「精路」、「精血」、「精経脈」、「精室」、「精囊」などの語があり、また「睪系(えきけい)」に「セイミチ」という意味ルビを付したり(Fig. 15)、「睪ノ精」という表現があったりして、「睪丸(えきがん)」の本質的内容が「精」であることを示している(Fig. 16)。したがって、「精巢」という語には、じゅうぶんの歴史的根拠があり、むしろ「精」は「睪」よりも古く男性機能との関連において登場している語なのである。

「精巢」は「卵巢」と対応する合理的な語であり、当用漢字に含まれているので、印刷物作成のさいに活字がなくて困ることもなく、「睪」と「舉」の混在も避けうることとなる。また「精巢癌」のように、下に「がん」と発音する語を付しても異和感がない。当然のことながら、関連の解剖用語、病名、手術名なども「精巢」を中心に統一されることになり、「精巢上体」、「精巢炎」、「精巢上体炎」、「停留精巢」、「精巢摘除」、「精巢固定術」、「精巢性女性化症候群」などの用語が臨床上日常化するであろう。

一般社会に対する影響は、さほど大きいとは考えら

れない。すでに、中学校や高等学校の理科では「精巢」が定着しているし、性教育などにおける用語としても、きわめて適切である。かつてわが国の泌尿器科学の先輩は、「攝護腺」という語を捨て、一時的に「前位腺」²⁰⁾を経て「前立腺」へ移行した。その柔軟な姿勢と英知にならうべきときであると考えるのである。

ま と め

1. 男子生殖腺の学術用語は、日本解剖学会が1953年に決めた「精巢」であるが、これを忠実に用いているのは生物学と畜産学を第一とし、ついで基礎医学領域であって、臨床医学とくに泌尿器科学では、まだ、「睪丸」または「睪丸」に固執している単行本、論文、学会抄録が多い。同一臓器の呼称がこのように統一を欠くのは、学際領域の拡大しつつある自然科学にとって不都合なことである。

2. 「解体新書」(1774)から「普俵氏組織学」(1879)にいたる解剖学書7件、外科学書1件、医学一般2件の計10件の古医書について、男子生殖腺をあらわす用語を検討した結果は、1件を除きすべて「睪丸(えきがん)」であった。つまり「睪丸(えきがん)」が上記の時代には主流をしめた語であると推定できた。

3. 「睪丸(えきがん)」について語源的に考察を加え、同じような球状物が陰嚢内で間隔を置いて並んでいる状態をしめすことばであると推論した。

4. 「こうがん」という発音のもとに「睪丸」と「睪丸」の二つの表記が現実混在することは望ましいことではない。したがって、この際、国民的規模で「精巢」に統一するのがよいであろう。そのためには、まず泌尿器科医が、日常的に「精巢」、「精巢上体」などの解剖学用語に従うことである。

5. 「精巢」の「精」の文字は男子生殖器関係の語に、古より用いられていて、歴史的根拠を有しており、「卵巢」と対応する点からも、さらに精管、精索、精子、精囊、精液などとの関連においても、精巢はきわめて合理的な用語であり、1953年の解剖学会の制定は評価すべきものと考えられる。

本論文の要旨は、1984年6月15日、横浜市における第3回日本アンドロロジー学会学術大会において、大島博幸会長(横浜市大)の司会のもとに、「アンドロロジー序説」という冒頭のセクションにおいて口演発表した。その機会を与えていただいた大島教授に感謝申しあげる。

参 考 事 項

(古医書については本文中の記載にとどめる)

- 1) 石橋栄達・ほか：動物学，裳華房，1937
- 2) 内田 享：内分泌学実験法，建文館，1939
- 3) 日本解剖学会：解剖学用語，丸善，1953
- 4) 日本医学会・医学用語委員会：医学用語辞典，南山堂，1975
- 5) 園田孝夫改訂・楠 隆光：小泌尿器科学，金原出版，1978
- 6) 新島端夫・北川竜一編：標準泌尿器科学，医学書院，1983
- 7) 今村一男・岸本 孝・高崎悦司・和久良久：エッセンシャル泌尿器科学，医歯薬出版，1978
- 8) 阿曾佳郎・吉田 修・渡辺 決編集：必修泌尿器科学，南江堂，1983
- 9) 石神襄次・百瀬剛一・志田圭三編：泌尿器科内分泌学，金原出版，1976
- 10) 市川篤二・落合京一郎・高安久雄監修：新臨床泌尿器科全書，8A・8B睪丸機能とその異常，金原出版，1984
- 11) 第1回日本アンドロロジー学会学術大会抄録集，東京，1982
- 12) 第2回日本アンドロロジー学会学術大会抄録集，神戸，1983
- 13) 第3回日本アンドロロジー学会学術大会抄録集，横浜，1984
- 14) 寺島良安：和漢三才図会，復刻，東京美術，1979
- 15) 簡野道明：増補字源，角川書店，1955
- 16) 貝塚茂樹・藤野岩友・小野 忍：漢和中辞典，角川書店
- 17) 上田万年・ほか：大字典，講談社，1977
- 18) 小川環樹・西田太郎・赤塚 忠：新字源，角川書店，1978
- 19) 倉石武四郎：中国語辞典，第9刷，岩波書店，1973
- 20) 井上 翠：中国語新辞典，江南書院，1958
- 21) 袖珍英漢新詞典，北京，1982
- 22) 諸橋轍次：大漢和辞典Ⅷ，大修館，
- 23) 王 曉雄，中国人民解放軍総医院泌尿外科，北京市
- 24) 康 克非，上海第一医科大学皮膚科，上海市
- 25) 藤堂明保：漢字語源辞典，学燈社，1976
- 26) 加藤辰三郎・ほか：Neues Medizinische Wörterbuch，南江堂，1927

27) 谷口虎年：発生学概論，吐鳳堂，1947

29) 北川正惇：最新泌尿器科学，文光堂，1948

28) 森 茂樹・鈴江 懐：実験腫瘍学，南江堂，1935

(1984年7月6日受付)